東洋史研究
第三十四巻　第一号　昭和五十年六月　発行

唐代における青海・ラサ間の道程

佐藤　長

唐帝國の最大の敵は吐蕃であり、長期に渡って兩國は和平と戰爭を通じて、種々の形の交渉を持った。從って兩國の使節は頻繁に長安とラサ地方の間を往來したが、そのルートが何處を通ったかというと、必ずしも明確にはされていないのである。これに關して最も有名なのは、八二二年ラサ近郊で行われた兩國の會盟に派遣された劉元鼎の紀行であるが、それも中國文獻では、河州から青海の東南邊までと、ツェンポの牙帳近邊の地名だけで、青海の畔から牙帳までの間は、黃河の源に關する記事以外は空白で、何等のルートも示されていない。唯一つ殘された重要な旅程は、新唐書卷四〇地理志・鄯州鄯城縣の條に註の形で述べられているものであるが、これは鄯城（西寧市）からラサ近郊までの全旅程を詳しく記している。しかしその地名には難解なものが多く、一二の例外的な研究を除いて、何人もこのルートを地圖の上に設定したものはない。[1] ここにそれを試みるのは、當時のルートを正確に現代の地圖の上に再現し、唐・チベット交渉史或は唐代の歷史地理の上に少しく寄與することを念願するからに他ならない。

そこで、ここに用いる基本的な地圖・文獻を二三擧げておきたい。一般にこのような場合用いられる地圖はダス Sarat

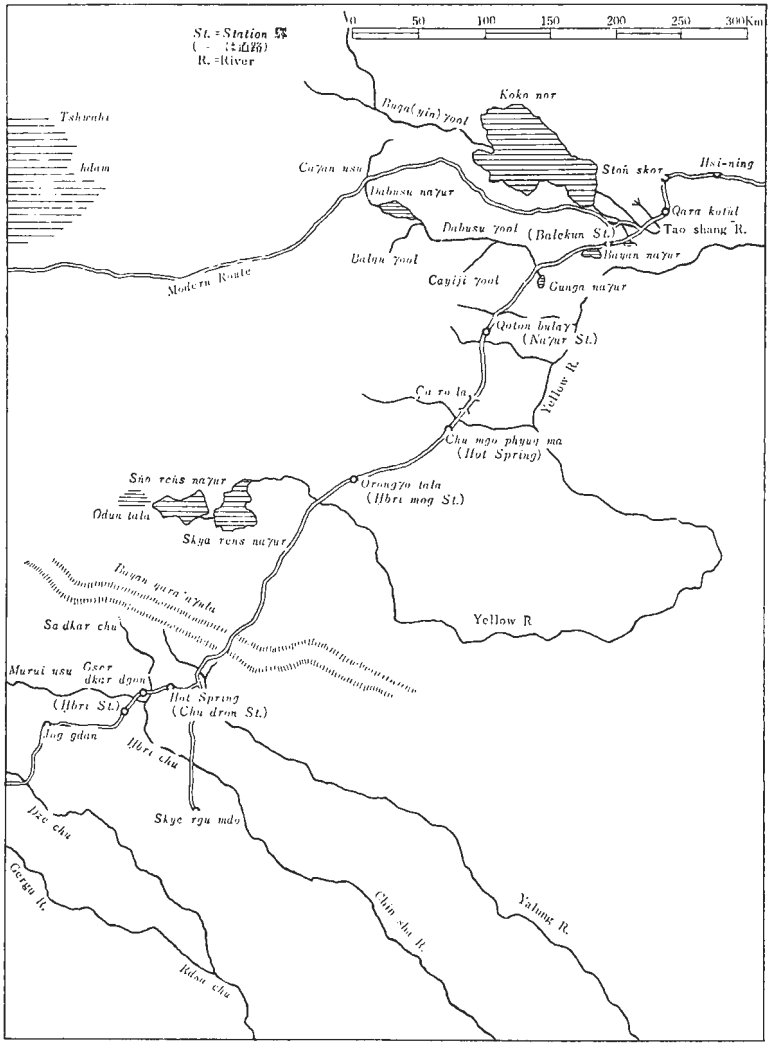
Chandra Das の地圖であるが、ここではそれとそれを一層詳細にしたホルディッチ Sir Thomas Holdich の地圖を用い、一部クラップロート Heinrich Klaproth の地圖を參照する。

文獻で特に參考にしたのは、玉樹稿十卷並に附錄一卷であるが、これは玉樹縣に關する地方志である。唯この書は「稿」であるためか、序文が全く付いていず、從ってその著者は不明となっている。しかしそれは別書　玉樹縣調査記一卷の著者、天水の人周希武と見てまちがいない。[5] その附錄は、周氏が一九一四年十月八日に、玉樹縣事情調査のため、皋蘭縣（蘭州）を出發して、湟源縣を通り、ジャリンノール Jaring nor〈Skya reṅs naγur の近傍を經て、同年十一月二十六日にジェクンド Jekundo〈Skye rgu mdo に至った旅行記であり、恐らくそのときの調査によってこの縣志が書かれたものと思われる。旅行記の內容は豐富で、特に地名と里程を詳しく記しており、參照すべき記述が少くない。實はこの書に記された旅程は、少くともムルイウス河 Murui usu までは、唐代のそれと殆ど一致しており、この書の參照によって、唐代のチベットルートを明かにすることができるのである。この書は從來何人によっても利用されたことがないので、特にこのことを注意しておきたい。なおムルイウスより西へのルートは、他に參照すべきものがなく、地圖だけに賴ってルートを辿ってゆくであろう。

又チベット文獻では、第三代パンチェンラマの傳記の一部（B3PC）を利用した。第三代パンチェンは乾隆帝の古稀の祝賀式に參列するため、一七八〇年七月に北京に到着したが、タシルンポ Bkra çis lhun po を出發してからの道程が、彼の傳記の中に記錄されている。それは大體において當時の官道に沿うものであるが、時に唐代のルートと重なるものがあり、頗る參考になる。

さて新唐書地理志の旅程は、驛によって文章が區切られているので、それらに番號を附して引用するが、ここでは便宜上、鄯州・石堡城間は別稿に讓り、[3] 石堡城・ラサ近郊間を取扱いたい。

（西寧よりジョダンまでのルート）



（一）有定戎城、又南隔淵七里有天威軍、軍故石堡城、開元十七年置、初曰振武軍、二十九年沒吐蕃、天寶八載克之更名、又西二十里至赤嶺、其西吐蕃、有開元中分界碑。

周氏は東科寺 ＜Stoń skor dgon pa の南三十五里の地にある哈拉庫圖城[4] ＜Qara kötül について次のごとく言う（玉樹稿二六七頁）。

> 約水の東西二源からの小河が〔哈拉庫圖爾〕城の北で合し、城はその西南山麓にあり、形勢は頗る險である。西は日月山まで二十里あり、蒙古族、チベット族が入ってくる大道を抑えている……城の東南の丘の上に古い城塞の遺跡があり、川を隔てて東北の山城にもまた古い時代の軍馬養育所がある。附近の崇淑には科瓣臺がある。

周氏はこの二つの遺跡について、通鑑開元十七年、信安王緯の石堡城占領の條の胡注を參照し、南東の丘の上のものを石堡城と見、北東の山の上の科瓣臺を定戎城の跡と見ている（玉樹稿二六七頁）。胡注は定戎城、石堡城については、（一）の文と同じことを言っているのであるから、周氏の石堡城の位置比定は動かないものと見てよい。また崇淑 ch'ung shu は Rdsoń çul（廢城趾）で、科瓣 k'o pan は Mkhar spańs（棄てられた城）と考えられるから、周氏がこれを定戎城の跡としたのは（玉樹稿二六八頁）、まず問題ないものとせねばならぬ。

周氏は更に、この地より西方日月山までは約二十里であるが、山は皆赤色で、これがまさに赤嶺であろうと言う（前掲書）。そして山頂より以東は農耕社會で、村の並木道が續いて絶えず、山の以西は遊牧社會で、荒野が廣く續き、時に牛羊の群が見える、故に唐蕃の境界碑は今はないけれど、ここが漢蕃の境界をなすことの來源は久しいものがあると言う（玉樹稿二七〇頁）。これによって赤嶺とは日月山の或る嶺を指すことは明かである。因に赤嶺に境界碑が建てられた年次は、開元二十一年（七三三）、或は同二十二年（七三四）である（古代史上四六六頁）。

（二）自振武經尉遲川・苦拔海・王孝傑米柵[5]、九十里至莫離驛。

周氏は赤嶺を下って南西行し、黑城子を經て、その南東の阿什漢城に至っている（玉樹稿二七〇頁）。その側を流れる阿

什漢水を土地の人は倒淌河と呼んでいるが、これはその河の上流に當り、東流しており、山中で一回轉して更に下流が西へ向いルートの上に再び現れてくるから倒淌河と言うのだと言う（前掲書）。尉遲川の尉遲 jiuat d'i は恐らくこの阿什漢と同源の言葉であろう。

周氏は阿什漢城から二十里で、今度は西方に流れる倒淌河の下流に出、察罕城 ＜Caγan qota に到着している。その河岸が水草豊かで牛糞が多いので、ここにキャンプして一夜を過している。ここが苦拔海で、苦拔 k'uo b'wat は köbegü（n）（岸邊）を寫しており、海は平野を表した言葉である。[8]

周氏は更に進んで一〇里餘で瓦爾袞山に到着するが、これがダス、ホルディッチにあるバレクン峠 Balekun Pass であろう。語頭の瓦 wa は ba 音のアムド方言的發音と考えられるから問題はない。莫離驛はこの附近にあったはずで、莫離 *b'âk li は Bale を寫した言葉に違いない。周氏の道程を計算すると、カラコトルからチャガン城まで七〇里、それにバレクン峠まで一〇數里であるから合計八〇餘里で、本文の振武軍石堡城から莫離驛までの距離九〇里はここに完全に一致する。

唯、王孝傑木柵の所在は明かにできない。楊應琚は、「木柵は尉遲川の西にある」と言うが（西寧志卷七、六丁裏）、恐らくは本文によって、そう言っているだけであろう。

（三）又經公主佛堂・大非川、二百八十里至那錄驛、吐渾界也。

公主佛堂の所在は不明である。松田氏はこれを、「蓋し吐谷渾に降嫁した公主の造營に係はる佛寺の意であらう」とし吐谷渾の首都であった伏俟城附近にあったと認め、その城を青海の西岸に近かったとされるが（遣使考上六六頁）、吐谷渾に降嫁した公主にのみ關係づけられるかどうかは疑わしい。楊氏はこの佛堂を、「大非川の東にある」と言っているが（西寧志卷七、七丁表）、やはり本文によって漠然とそう言っているだけであろう。大非川そのものについても、「王孝傑木柵の西にあり、吐谷渾の國境に臨んでいる」と言っているからである（前掲書卷四、一六丁裏）。

問題なのは大非川で、唐代前期には、唐・吐蕃の戰は屢々ここで行われた。シャヴァンヌ Edouard Chavannes は、通鑑輯覽（卷五二、一八丁表）に大非川についての註に、「大非川は青海の西にあって、今の布喀川 Buqa (yin) γool である」とあるのを紹介している。[7] 張穆も通鑑輯覽に據ったのか、やはりこれをブハ川に比定している。[8] 通鑑輯覽、張穆共に兩唐書吐蕃傳の開元十五年正月の條に、「王君㚟が青海の西の大非川の近傍で悉諾羅 ＜Stag sgra の軍を破った」と言う記事によって、大非川をブハ川と認定したのであろう。しかし當時の「青海の西」と言うのは、我々の考える西方ではなくて、青海が、東南に入江のごとく出ている突端から西、すなわち湖の南西岸を言っていることは明かで、さればこそ通鑑考異は十道圖によって、「大非川は青海の南にある」と言っているのである（通鑑卷一九四、一〇丁裏、胡注）。大非川が何處にあるかは困難な問題であるが、實は極めて普通の史料からこの問題は解決される。すなわち嘉慶重修大清一統志（卷五四六、三丁裏）に、鹽池の說明として、

鹽池は青海の西南にあり、周圍は一〇〇餘里、青鹽を產する。西拉庫特兒山の莫和爾布拉克地の揷漢烏蘇河が西から流れて來、集ってこの湖となっている。また巴爾虎河・柴集河を合せて、名づけて鹽河と言い、東南に流れて功額池に入る。

という。內府輿圖九排西二を參照すると、鹽池は有名なダブスノール Dabusu nayur であるが、莫和爾布拉克はブハ川の南岸の墨和爾布拉克 ＜Muqur bulay であろう。その所在地の西拉庫特兒山は、その川の北方にある庫德里阿林（內府輿圖九排西二）或は科得里山（新輿圖）で、Kötül ayula であろう。揷漢烏蘇河は Cayan usu で、大抵の地圖にはムフルブラックから出る小河が明かにダブスノールに注いでいるから、これがそれで、その河口に匝哈烏蘇、又は茶卡がある。この湖の東邊から河が流れ出、巴爾虎河 ＜Balqu γool、柴集河 ＜Cayiji γool を合せて東流して功額池 ＜Gunga（＜Kundgah) nayur に入る。それが鹽河と名づけられているのは、ダブス河 Dabusu γool の意譯から來ているにちがいない。とすれば大非 d'ái pj^{w}ei は音の上で Dabusu と完全に一致する。ダス、ホルディッチでは Hoyuyun River、中國地圖

では惠渠とあるのがこの河である。

これに關聯した山名として、兩唐書吐蕃傳には、大非山・大非嶺などが見えるが、それらもこの川の近邊にあったものと考えられる。胡氏は「鄯城縣（西寧市）から西行三〇〇餘里で大非川に至る」と言うが（通鑑卷二〇一、一八丁裏）、周氏の道程で、西寧からチャブチャル Cabciyal まで三五〇里あり、その先にダブス河があることになるので、胡氏の言う三〇〇餘里は略々まちがいないものと見てよい。

さて引續いて那錄驛であるが、これは周氏の言う切吉河腦であろう。同氏はこれを、ヨーロッパ地圖に記載される和屯布拉克 ＜Qoton bulaγ に比定し、水草牛糞が皆適度に存在することを言っている（玉樹稿二九一頁）。ここはその名から考えて、當然湖があったはずで、那錄 nâ lj^{w}ok は naγur を寫したものと考えられる。瓦爾袞山より計算すれば二六〇里餘となり、本文の二八〇里に一致する。周氏はこれから險峻な山を越え、大河壩水の流域に出るが（玉樹稿二九一頁）、本文では那錄驛が吐渾の國境であると言うから、この山あたりまでが吐谷渾の領域であったのであろう。ここより七〇里行くと班禪玉池があり（玉樹稿二九二頁）、また四〇里で扎梭拉溝 ＜Bya sa la chu があって絶好の野營地であるが（玉樹稿二九六頁）、距離が一致しなくなるので、切吉河腦を那錄驛と見なしておく。

（四）又經暖泉・烈謨海、四百四十里渡黃河。

周氏は扎梭拉山から九〇里で欽科奢馬に至るが、ここには溫泉が若干あり、水が盛に湧いて川となって流れていると言う（玉樹稿三〇〇頁）。欽科奢馬 ch'in k'o shê ma は、譯せば「泉が多い」の意と言うから（前揭書）、Chu mgo phyug ma であろう。chu mgo の音はアムド方言では čingo であり、[8] phyu の音は、同方言で ʂu であるからである。暖泉は明かにこの Chu mgo phyug ma の地である。

烈謨海は、楊氏の述べる西寧・ラサ間の道程で、黃河より七〇里手前の所にある阿隆阿他拉 ＜Orongγo tala？（西寧志卷二一、二三丁裏）を指していると思われる。その說明に、「藥草がある」と言っているから、それは多分、興奮劑の一種

として用いられるリモ Ḥbri mog を指しているのであろう。烈謨 lïät mâk はこの語に完全に一致する。

周氏の黄河に到達した地點は、オリンノール Oring nor〈Śio reṅs nayur より二〇〇里ほど東方に離れた所と言うが（玉樹稿三一三頁）、やはり本文の黄河渡渉點もそのあたりであると思われる。勿論それより西方の河源と言われるオドンタラ Odun tala を通る道もあるが、本文でそれに何等觸れていないのは、やはりこの道がジャリンノールの東方を通ったことを示している。ホトンブラクから黄河までは、周氏の計算では四五〇里であり、本文の四四〇里と大體において一致する。

（五）又四百七十里至衆龍驛、又渡西月河、二百一十里至多彌國西界。

周氏は黄河から西南に向い、バヤンカラ山 Bayan qara ayula を越して、三四〇里の永沙族（ユンシェブゥ Yüngsiyebü）の所に溫泉があることを言っているが（玉樹稿三三二頁）、これが衆龍驛であろう。衆龍 tśiung lïʷong は Chu dron（暖水）の音譯と考えられる。ユンシェブゥ族は、西方は薩拾拉吉山を隔てて娘磋族（ニャムツォ Ña mtsho）と接している（玉樹稿三三一頁）。薩拾拉吉山 sa ko la chi は Sa dkar rtse で、その山の西側にあるのがセカル寺 Sikar gompa（ホルディッチ）〈Gser dkar dgon pa であろう。[10] 而してこのセカル寺の側を流れるチェチュ Chie chu（ホルディッチ）がサカルチュ Sa dkar chu で西月河であろう。西月 siei ngiʷät は Sa dkar の音譯に相違ない。從って今まで南西行したルートは、衆龍驛から正西に向うこととなる。恐らくこのニャムツォ族のいる所が多彌國の西の境界になるのであろう。

なお周氏はユンシェブゥ族の所から南下してジェクンドに至るので、我々はここで同氏と別れて西進しなければならない。

多彌と言う種族は、吐蕃からは難磨と呼ばれていたと言うが、難磨 nân b'a は Ñam pa であろう。ケーペーガトン Mkhas paḥi dgaḥ ston, Ja には、吐蕃に必需品を供給する四人の王の名を擧げているが、それは、

Nam pa　Ide rgyal

Bal po　　li rgyal（金屬の王）
Sum pa　　lcags rgyal（鐵の王）
Mon　　rtse rgyal（樂器の王）

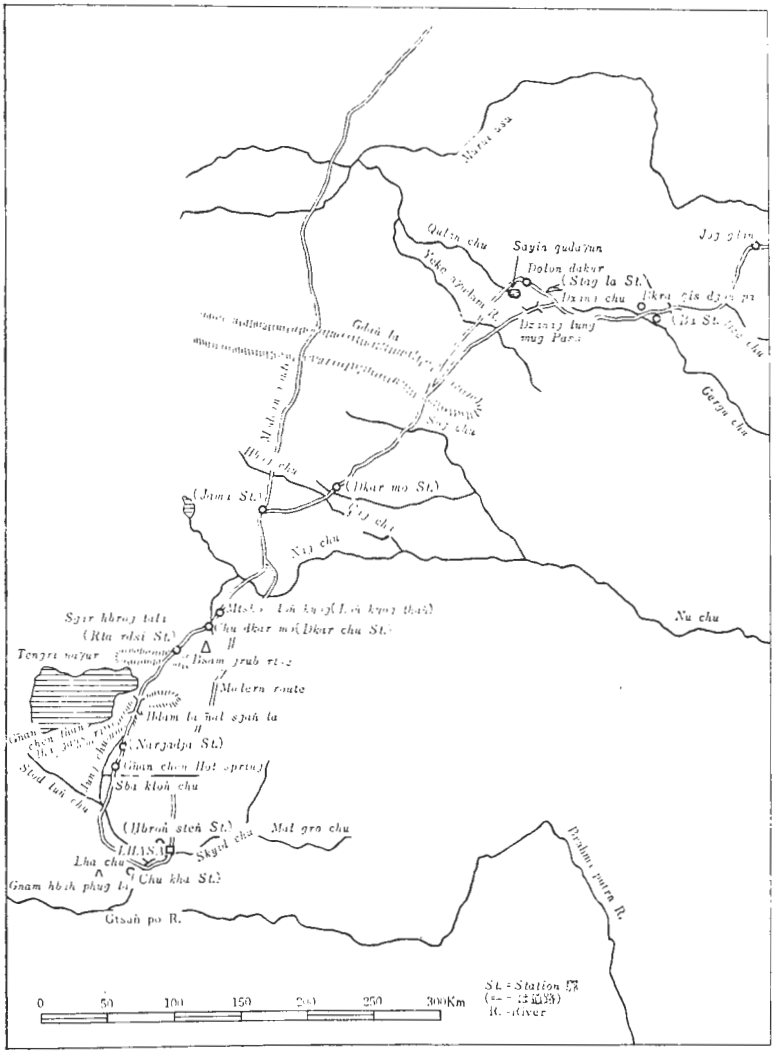
で、[11] 何れも吐蕃に服屬した種族であり、Nam pa も例外でないとすれば、これこそ難磨に當るものであろう。唯その王が lde rgyal と呼ばれる理由は明かでない。lde の意味は難解であるが、トゥッチ氏 Giuseppe Tucci はこれを「裝飾品」ornament と考えるのが適當であるとしており、[12] これに從いたい。多彌はムルイウスの流域に住し、沙金を多く產し（新唐書西域傳二）、その故にこの河は中國では金沙江（揚子江上流）と呼ばれる程である。この沙金が裝飾品或はその材料として吐蕃に貢されていたが故に、その王は「裝飾品の王」と稱されるようになったのであろう。

（六）　又經犛牛河、度藤橋、百里至列驛、又經食堂吐蕃村・截支橋、兩石南北相當、又經截支川、四百四十里至婆驛。

犛牛河はリチュ Ḥbri chu で、ムルイウスまたは現代地圖のディチュ Di chu であって問題はない。藤橋はそこに架けてある籐類で作った橋であろう。列驛は明かでないが、リチュの近くであるから、列 liät は Ḥbri を寫したものと思われる。[13]

食堂はダス・ホルディッチに Djou dung とある所であり、スタン氏 Rolf Stein は、チベット文獻に出る Zo thań, Ço thań と一致するとしているが、[14] 正しいであろう。第三代パンチェンの道程では、玉樹地方 G-yu çul 通過のとき、表敬訪問した僧に、ジョダン寺 Jog gdan dgon pa のラマがあり（B3PC, p. 80b）、これも食堂 d'ź'i̯ek d'âng に一致するので、同一地點と考えられる。周氏の報告によれば、玉樹族の地にある黃帽の寺院として、二八〇人のラマを擁する覺讓寺 chiao jang ssu と言うのがあり（玉樹稿一一七頁）、これがその地にある寺院であろう。それがわざわざ吐蕃村と斷ってあるのは、ここがルートの上で初めての吐蕃人の村落であることを示している。すなわちリチュまでは多彌族の地で、ここに至って初めて吐蕃人の境域に入るのである。

（ジョダンよりラサまでのルート）



截支橋は截支河に架けられた橋であり、截支 dz'iet t'śię はゼチュ Dze chu（ホルディッチ）を寫したものであろう。ルートはジョダンから南南西に向い、ゼチュの上流を横切るのである。ゼチュは玉樹稿の地圖では子曲 tzŭ chü と出てくるものである。「兩石南北相當」とは、兩岸に大岩があり、相せまっていることを言うのであろう。婆驛については、次項で説明する。

（七）乃度大月河羅橋、經潭池・魚池、五百三十里至悉諾羅驛。

大月河はダスに Gergu River と出てくるもので、ホルディッチのザチュ Rdsa chu を指している。この河は、この邊では最も大きい河なので、大と言う形容詞が付けられたのであろう。玉樹稿の地圖によれば、河は格吉族の住牧地を通っており、格吉 ko chi はザムリンギェシェ Ḥdsam gliṅ rgyas bçad に出てくるゲルツェ Dge rtse と考えられるから（DLGS, p.103）、Gergu は Dge rtse が正確な綴字であり、發音は gertse, getse で、月 ngi^{w}ɐt はこの音を寫したものであろう。羅橋は籐を網のように結んで作った吊橋であろう。

ところでこのザチュの南側には、瓦里拉と呼ばれる小山脈が横わっている（玉樹稿地圖）。瓦里拉は恐らく Brag la で、ホルディッチの Barak la であり、ba が wa に變化するのは、アムド方言によるものであろう。しかし驛名の婆 b'uâ はこの Brag の別音 bā とは關係なく羅橋すなわち籐橋 Sba zam の Sba から來たものであろう。この驛がザチュのすぐ東側にあったことは、本文に、「至婆驛、乃度大月河」とあることから推定され、それはダス・ホルディッチのタシゴンパ Dasi gompa ＜Bkra çis dgon pa のあたりであろう。

ここから道はザチュの南岸を西方に辿り、潭池・魚池を通るが、これらの池のチベット名は分らない。ただダスにはドンブラ Dunbula の南邊、ザチュの北側に一つの小湖が見え、扎生吉尔湖 cha shêng chi êrh hu（新輿圖）がそれだとすると、Jiyasun jüil nayur（魚類湖）と考えられる。內府輿圖十排西三に扎新齊爾舍里 cha hsin chi êrh shê li とあるのは Jiyasun jüil sirig で、「魚類（湖）のある草地」の意であろう。[15]

悉諾羅驛は頗る難解であるが、多分ドンブラの西方にあるドロンダクル Dolon dakur（ダス・ホルディッチ）と考えられる。悉諾羅 siet d'ák lâ は唐代文獻に人名として屢々現れ、Stag sgra が當てられるが、ここでは Stag la とも考えられる。dakur はまさに、この stag sgra 又は stag la の蒙古語的訛音であろう。清代の道程ではこの地點は托伙六托洛海（西寧志卷二一）、又は土乎魯托洛海（衛藏圖識卷下・新興圖）とあるもので、タクルトロガイ *Takra tolorai が多分、正しい形と見なされる。それではドロンとは何かであるが、恐らくこれは、清代の次の驛のドロンバートル Doloran baratur と混同したためと思われる。この地點は、內府興圖・新興圖などでは、みな多倫巴圖爾なる名を與えられており、土乎魯托洛海とは全く別の地點である。しかしタクルトロガイとドロンバートルとは近接地であるから、ダス・ホルディッチともに誤って一地となしたのであろう。兩者ともにドロンバートルの地名を出していないのはそのためと思われる。タクルトロガイは清代の官道上の一地點であり、唐代のルートはここでチベット高原に上り、清代の官道に一致して、暫くの間、西進することになる。

なお本文では婆驛から悉諾羅驛までの道は五三〇里あると言う。しかしダス・ホルディッチでは、以前の道の長さと比較して、長く見て三五〇里程度で、如何にしても五三〇里あるとは思えない。或は五三〇里は三五〇里の誤ではないかとも考えられるが、實はこの間の道は、地圖の上で考えられるような容易な道ではないのである。デュトレイユ＝ド＝ラン Dutreil de Rhins は一八九四年四月八日に、タクルトロガイの正南のザナルンムク峠 Dzanag lung mug Pass（ダス。ホルディッチでは Dzang lung mug Pass）を出發し、ザチュの上流ザンチュ Dzang chu に沿って、同月十六日にタシゴンパに着いている。[16] この間八日を費したのであり、それより少しく長いタクルトロガイとタシゴンパの間は一〇日はかかっているであろう。況してこの邊はザナルンムク峠の海拔五二六〇メートルから考えると、それはルートの上での最高の地であり、その通過に肉體的に非常に困難を伴う地帶である。唐代における旅程については、大唐六典卷三に、

陸を旅行するには、馬では日に七〇里、步行および驢では五〇里である。

とあり、周氏の旅行でも、一日に四〇—七〇里であることを参考にすると、道の悪條件を考え合せて、一日五〇里とすれば、一〇日で五〇〇里である。従って、この間が、本文で五三〇里と記しているのは、ほぼ一致し、誤った里數とは考えられない。

（八）又經乞量寧水橋、又經大速水橋、三百二十里至鶻莽驛、唐使入蕃、公主毎使人迎勞于此。

悉諾羅驛を過ぎて、最初の河はクランネ河 Qulan-ai γool であり、これが乞量寧水であろう。ホルディッチによれば、タクルトロガイの北にサインクダクン Sain kudakun＜Sayin qudduγ-un naγur なる湖があり、そこからクラン河 Kulan River が流れ出、下流でイェヘアクダムに注いでいる。それで乞量寧水 kʼiət ljang nieng は Qulan-ai γool（野驢の川）を寫したものであろう。新輿圖には烏藍水と書いているが、それは音の類似から Ulaγan γool と誤解されているのである。現在この地帶は、清中期以後、ゲルツェ族の遊牧地となっていることが確認されるが（西寧志卷二一、二三丁裏）、それにしても、唐代にこの邊にまで蒙古語名があったのは、或は吐谷渾の支配の影響かもしれない。

クラン河からイェヘアクダム河 Yeke ag ḥdam chu を横切り南西に進み、ダンラ山脈 Gdaṅ la（當拉）を越して、大速水に達するが、大は形容詞で、速水がソグチュ Sog chu を寫し、Sog chu（ホルディッチ）、Suk chu（ダス）であることは明かである。續いて鶻莽驛に到達するが、この驛については次項に述べる。

（九）又經鶻莽峽十餘里、兩山相崒（そばだち）、上有小橋、三瀑水注如瀉缶（ほとぎ）、其下如煙霧、百里至野馬驛。

鶻莽驛は鶻莽峽の側にあったと思われるが、それは多分內府輿圖十排西三の巴延噶爾穆、ダスのバインガルモ Baingarmo で、正確な綴字は Bayan dkar mo と考えられる。唯、內府輿圖ではここを通る河はシャグチュ Çag chu の支流であり、ダスではソグチュの支流である。今はダスに從っておく。鶻莽 γuet mâng はこの dkar mo を寫した言葉であろう。册府（卷九六一、一七丁表）には、鶻莽山を紹介して、「山の西八里に、三峽のごとき所があり、大瀑流があって、雷のような瀑音が聞える」と言い、更に、「その山は遠くから見ると、色が黄色で白い」と言っているから、この場合の

鶻莽が dkar mo（白色）であることはまちがいない。鶻莽峽もこの山名から來たものに相違ない。ここより少しく南を流れる河はショグチュ Shog chu（ホルディッチ）で、Çag chu が正しい綴字である（同文志一一六七頁では Shog chu）。この河をクラップロート Klaproth は Boukchak、その上流を Bouk と呼んでいるが（ホルディッチ八六頁地圖）、內府輿圖は確にこの上流を博克必拉 po k'o bira と名づけている。博克は Ḥbog であるが Boukchak は Ḥbog Çag であろう。この地は、一七二〇年に清の大軍が第七代ダライラマを奉じてラサに進軍したとき、この邊を中心にジュンガル軍が略奪を働いていたと言うから、[17] やはり重要地帶であったと見なされる。公主が唐の使者を迎えさせたと言うのも、つまりはそのような重要地帶であったからであろう。

野馬驛の野馬 źiwo ma は、ダス・ホルディッチのジャマ Jama（＜Rgya ma?）に一致し、この地で現在は、北方から來る隊商路が合流し、道は南下する。

（一〇） 經吐蕃墾田、又經樂橋湯、四百里至閻川驛。

樂橋湯は、多分內府輿圖十排西三の租隆交であろう。租隆交 tsu lung chiao は Mtsho loṅ kyog（腸のごとく曲りくねった湖）（同文志一三二一頁）で、その沿岸にあるのが樂橋湯 lak g'iäu t'âng＜Loṅ kyog thaṅ であろう。從ってジャマからここまでのうち、ナチュカ Nag chu kha までは清代の官道と同一で、ナチュカからは少しく官道を西へそれることになる。

閻川驛は、チュガルモ Chu dkar mo＞楚噶爾穆（內府輿圖十排西三）の側と考えられるが、道は既に官道から離れているので、現在のチュガルモより少しく西寄りの地點であったであろう。閻 γâp または kâp は明かに dkar（mo）を寫している。

（一一） 又經恕諶海、百三十里至蛤不爛驛、旁有三羅骨山、積雪不消。

恕諶海は不明であるが、內府輿圖十排西三の沙巴克拉爾あたりであろうか。

蛤不爛驛は、岳克珠噶爾都（內府輿圖十排西三）、岳克珠噶爾多克塔拉（新輿圖）であろう。岳克珠 yo k'o chu は、第三代パンチェンの渡った Dbyug chu で（B3PC, p. 71 b）、噶爾都 ka êrh tu・噶爾多克 ka êrh to k'o は sgar ḥbrog と還元され、夏の遊牧地を意味する。塔拉 t'a la は言うまでもなく tala である。蛤不爛 kâp piəu lan はこの Sgar ḥbrog を寫した文字に違いない。

三羅骨山は、恐らく三骨羅 sam kuət lâ が正しく、Bsam grub を寫したものであろう。この山は、中國の現代地圖では、ルートの西側に存在する薩穆坦岡雜山（內府輿圖十排西三・新輿圖）と同一で、Bsam gtan gaṅs ri（同文志一一六四頁）がこれに一致する。とすると岡雜は岡離の誤りのようにも見えるが、ダス・ホルディッチともに Samden kansa Pk. なる名稱を出しているので、誤りとばかりは決定できない。また Bsam grub（rtse）と言う名は、新輿圖ではその山麓に双竹山口なる地名を置いているから、現在でも使われている名稱なのであろう。

唯、Bsam grub rtse（Dhyāna-giri）の名が唐代にあったとすると、當時既に、吐蕃に佛教寺院があったことになる。しかし本文（一四）では、ラサの近傍に佛堂と言う地名が出てくるから、あっても不自然ではない。同文志（一一六四頁）には、

薩木丹は禪定の謂で、山には積雪が多い。昔番僧がここに禪定したのでこの名が付けられた。

と說明しているが、これは傳說ではなく、遙か吐蕃の時代の事實を傳えているのである。

（一二）又六十里至突錄濟驛、唐使至、贊普每遣使慰勞于此、又經柳谷莽布支莊、有溫湯、涌高二丈、氣如煙雲、可以熟米、又經湯羅葉遺山及贊普祭神所、二百五十里至農歌驛。

突錄濟驛は、地圖の上でも文獻の上でも見出せない地名であるが、唯、同文志（一一六九頁）にタルジ山 Rta rdsi ri（達爾子里）なる山名が擧げられ、明かに突錄濟 t'uət lj^{w}ok tsiei に一致する。同文志には次のような說明が付けられている。

チベット語で達爾子は牧馬の人の意である。傳說によれば、唐拉汗の牧人が神となり、曾てこの山に現れた。故にこのような名が付けられたのである。

唐拉汗はタンラカンリ山 Thaṅ lha gaṅs ri の略で、テングリノール Tengri naγur の東南に横わるニェンチェンタンラカンリ山 Gñan chen thaṅ lha gaṅs ri を指しているのであろう。汗 han は khan ＜qaγan の意にとれば、或はこの地方の支配者または神を指しているとも考えられるが、ここでは gaṅs ri の略された形と解しておく。タルジ驛の位置は明かでないが、テングリノールの北邊に東西に横わる山脈があり、それを越す所にあったと思われる。

柳谷莽布支莊は全く分らないが、莽布支 mâng puo t'siẹ は maṅ po rje で支配者の稱號であるから、或はその莊園のあった所であろう。位置はテングリノールの東邊の草原いわゆるダム Ḥdam にあったであろう。

溫湯は多分、西藏圖考（卷一、一五丁裏、一六丁表）に、達木遊牧（ダム草原）の南にある寗仲湯泉で、寗仲 ning ch'ung は Gñan chen に相違なく、その溫泉はニェンチェンタンラ山の麓にあったのであろう。

湯羅葉遺山については、遺は遣の誤りと見れば、t'ang là jäp k'jän でダムラニェルガンの峠 Ḥdam la ñal sgaṅ la に一致する。この峠はテングリノールの北方地帶からその湖の東方を通ってラサへ通ずる道が、ニェンチェンタンラを越える所で、軍事的にも重要な峠である。ダス・ホルディッチではともに Dam niyargan la である。

農歌 nuong kâ は、この峠を越してジュンチュ Jung chu（ホルディッチ。チベット綴り不明）の流域に入った所で、川の東側に少しく離れて存在するナルガジャ寺 Nargadja Temple（クラップロート。チベット綴り不明）に相違ない。タルジ驛からナルガジャ驛まで二五〇里は地圖の上でも妥當である。

（一三）　邏些在東南、距農歌二百里、唐使至、吐蕃宰相每遣使迎候于此、又經鹽池・暖泉・江布靈河、百一十里渡姜濟河。

「ナルガジャからラサは東南二〇〇里」とあるが、嚴密に言えば、方向は南南東であり、最短距離でも二〇〇里以上はあって、三〇〇里の誤りではないかと疑われる。鹽池・暖泉はともに不明である。

江布靈河も難解であるが、布靈河 puo ling とすれば、ナルガジャの南にバルンガン寺 Ba loung gang Temple があ

るので（クラップロート）、この所を流れていた河であろう。同文志（一三一一頁）に、巴隆楚 Rba kloṅ chu なる河名があり、「波 rba kloṅ が多いからこのように名づけられた」と註されている。或はこの河ではないかと思われるが、疑を存しておく。それにしても江の意味は不明である。

姜濟河の姜濟 kiang tsiei はジュンチュ河 Jung chu で、そのトェルンチュ河 Stod luṅ chu（ヤンパチュンチュ Yans pa can chu）に流入する所でこの河を渡ったのであろう。従ってこれからはトェルンチュの南岸を東進することになる。

（一四）經吐蕃墾田、二百六十里至卒歌驛、乃渡臧河、經佛堂、百八十里至勃令驛鴻臚館、至贊普牙帳、其西南拔布海。

卒歌 ts'uat kâ は恐らくチュカ Chu kha（河口）で、トェルンチュがキチュ河 Skyid chu に流入する所であるから、現在のラチュ Lha chu の近傍であろう（GHP. map. 1）。キチュはチベット文獻でもツァンポ Gtsaṅ po と記され（GHP, p. 103, n. 94）、清代の文獻でも、「キチュはすなわち藏河である」と記したものがあるから（西藏誌六二頁）、臧河 tsâng をキチュと見ることは一向差支えない。ジュンチュとトェルンチュの合流點からここまでの二六〇里と言うのも妥當と認められるのである。

佛堂の位置は分らない。

勃令驛はラサの近邊であったはずであるが、これに當る地名は地圖の上では見當らない。唯フェラリ女史 Alfonsa Ferrari は、一四一九年のセラ寺 Se ra theg chen glin の建立に關して、ヴァイドゥーリアセルポ Vaiḍūrya ser po を引いて、その學部 grwa tshaṅ はセラトェ Se ra stod、セラメ Se ra smad、ギャ Rgya、ロンテン Ḥbroṅ steṅ の四つがあったことを言い、またスンバケンポ Sum pa mkhan po がパクサムジョンサン Dpag bsam ljon bzaṅ の中で、彼の時代にはギャとロンテンはセラトェに合併されたと言っているのを紹介している（GHP, p. 100, n. 81）。セラもギャも何等宗教的な意味を持たない言葉であることから考えると、それらはもともと地名であったのであろうし、ロンテンも恐らく地名であったであろう。とすれば、Ḥbroṅ steṅ の意味は、「接待する高臺」で、Ḥbroṅ は勃令 b'uat ljäng に完全

に一致する。更に全體の意味からすればそれは鴻臚館そのものである。古代チベット王國の崩壞とともにこのロンテンも荒廢したのであろうが、その名はセラ寺の一學部の存在地として、一四一九年には再興し、一八世紀の前半にその名は消滅したのである。從って勃令驛は現在のセラ寺の所にあったものと考えて差支えない。セラはラサの北方二・五マイルの所にあり（GHP, p. 99, n. 81）、ツェンポが外來の客を迎え、宿泊せしめるのには最も適當な場所であったのである。それにしてもチュカ驛からここまで一〇〇里ほどと思われるのに、一八〇里と言うのは少しく誇張があるように見える。

ツェンポの牙帳は、ここでは何等その位置が記されていないが、八二二年に唐・吐蕃の會盟が行われた場所は、「ラサの宮殿の東方のラトェ園 Sbra stod tshal」であったから（古代史下九二五頁）、現在のラサまたはその近郊であったと思われる。ツェンポの牙帳は常に移動していたが、ラサでは一定の所に所在していたのであろう。夏營地が、ラサの北東方のメルロ河 Mal gro chu の流域であったことについては、前に述べておいた。[19]

最後に拔布海の問題がある。これについては冊府（卷九六一、一七丁表）に、「その君長はあるときは跋布川に居り、あるときは邏些（ラサ）に居る」とあり、新唐書吐蕃傳上（一丁裏）に、「ツェンポは拔布川あるいは邏娑川に居る」とある跋（拔）布川と同一の地域であろう。本文ではラサの南西の地帶が拔布海だと言うから、それはキチュに沿った平野を言っているに違いない。ところでホルディッチを見ると、ラチュより南のキチュの西岸にナムバプックラ Nambapuk la なる山名を記している。Nam は Gnam ri で（同文志一一六九頁）、實はこの山の西側の山を指している。Bapuk la は西藏圖考（一〇四頁）に、險要の地として擧げられている巴布賴長嶺と一致する。同書の附圖に、この山の裏側すなわちヤンパチェン Yans pa can 寄りに巴布賴なる地名があることが、その山の位置を確定するであろう。ただしこの際の賴 lai は la を寫したのではなく、ri を寫したものである。西藏圖考（三一四頁）には、Ḥbri Chu を布賴楚 pu lai ch'u と寫しているのが、その例證である。而して Bapuk は多分 ḥbaḥ phug で、ḥbaḥ は「雄大」（同文志一一五五頁）、phug は「空濶の高原」（同文志一一〇一頁）の意味で、この山の廣大さからこのような名稱が起ったのであろう。跋布川 b'uât puo

は、Hbaḥ phug chu を寫したもので、河名はその山の呼名から來たものと考えられる。拔布海 b'wat puo xâi はその河の流れる平原を指したものであること勿論である。[19]

新唐書の吐蕃傳の文章は拔布川とラサ川卽ちキチュを別のものとして記しているごとく見えるが、實はそれは同一のものであったのである。恐らくは册府の文章が元のもので、新唐書はこのラサをラサ川と解釋したのであろう。

以上で石堡城からラサ近郊までの道程を檢討し終ったが、その結果は作成された二葉の地圖を參照されたい。地名についてはチベット語の原名が分らず、また位置の確定できないものも二三あるが、それらについては博雅の士の示教を待つより他はない。

ところでこのルートは清代のものとも、現代のものとも、かなり異ったところがある。清代には、西寧から黃河までの道は唐代のものと略々一致し、黃河を越えてからは、その北方の高原地帶を南西へと進む。而してタクルトロガイでそれは再び一致し、ジャマを少しく南下した所でまた西方へ別れ、ジュンチュ・トェルンチュに沿って東に彎曲し、ラチュの所からキチュに沿って北東へと遡るのである。黃河からタクルトロガイまでの道の相違はともかくとして、ジャマより西方へ大きく回ってラサへ入るのは、甚しい廻り道ではなかろうか。清末民初にはジャマよりラサまでの道は殆ど正南に向っており、この間の最短のルートとなっている。何故唐代にはこの最短のルートをたどらなかったのであろうか。今この疑問に明確な回答を出すことは困難であるが、近代の南下路は、實はその途中の山々に峻險な所が多く、また岩石の多い荒野が續くなど、步行にかなり惡條件がそろっているらしい。峠なども、後世、岩山を切通して漸く通ずるようになった所があるらしい。唐代の道の狀況からすれば、やはりジャマからニェンチェンタンラ山脈の東側を通る迂回路を取るのが、最も良い方法だったのである。

それではこの新唐書地理志の旅程は唐代の何時頃のものであったのであろうか。これについては古くブッシェル S. W.

Bushell が次のごとく述べている。[29]

この旅程が何時頃のものかについては何等記されるところはない。しかし含まれている事實からすれば、それは、赤嶺の境界碑が建てられた七三四年と金城公主が沒した七四一年の間のものでなければならない。

興味ある見解であるが、境界碑の建立は開元二十一年（七三三）であり（四頁）開元二十六年（七三八）玄宗の命によって毀たれるまでは存在したから（兩唐書吐蕃傳上、一〇丁裏、通鑑同年六月辛丑の條）、本道程の原文は七三三—七三八年に作られたことが分る。また本文（一）には、開元二十九年（七四一）天寶八年（七四九）の石堡城關係の記事が入っており、これによれば開元二十九年以後の記事は後から書加えられたものとせねばなるまい。開元および天寶の初期は唐の帝國の黄金時代であり、吐蕃との間にはかなり激しい戰鬪が行われたが、使節の往來も亦多かったので、このような旅程が書き殘されたのであろう。この旅程の最初の文が七三三—七三八年の間に作られたものとすると、それから導かれる重要な事實は當時既に佛教がチベットで行われていたと言うことである。サムルブッェと言う佛教に關係ある山名（本文一一）、或は佛堂と言う地名（本文一四）は、吐蕃における佛教が七三八年までにその基礎を置いていたことの重要史料となるであろう。

なお注意しておきたいことは、青海地方の地名に蒙古語で解釋できるものが若干あることである。吐蕃の時代の地名を蒙古語で解釋するのは、甚だ奇妙に思われるかもしれない。しかし吐蕃が青海地方を占領する前に、この地を支配していたのは吐谷渾であった。そして吐蕃占領後も若干の吐谷渾は青海に殘っていたのである。ペリオによれば、吐谷渾の支配民族は蒙古語に近い言葉を話す人々であったと言うから、[30]蒙古語を以て一應解釋できる地名があったとしても不思議ではない。尤も現在でも青海・チベットには蒙古語の地名は少くない。否むしろ驚くほどそれらは多いのである。しかしそれらは一六世紀以降、青海地方に蒙古族が大量に移動し、そのうちのホショート族などは、チベットまで征服したほどであるから、彼等によって蒙古語の地名が多く付けられたと見るべきであろう。それらは吐蕃の時代の吐谷渾語とはまた異ったものとしなければならないのである。

註

① ヨーロッパで最初にこの旅程を紹介したのはブッシェル S. W. Bushell である。彼は舊唐書卷一九六上・下、吐蕃傳上・下の英譯 The Early History of Tibet from Chinese Sources, Journal of Royal Asiatic Society, 1880, p. 434—541 の中にこの新唐書地理志の道程を翻譯し、附載しているが (ibid. p. 538)、地名の比定は殆ど行っていない。又ペリオ Paul Pelliot は兩唐書吐蕃傳の佛譯 Histoire ancienne du Tibet, Paris, 1961 の卷末に、この道程の譯を附しているが、これ亦地名の比定は極めて僅かである。日本では足立喜六氏が「唐代の泥波羅道」支那佛教史學第三卷第一號（一九三九年）の中にこの文を引用し、地名比定をすべてにわたって行っているが、ルートはリチュ河 Hbri chu を横斷して南下し、四川からのルートに合して、それより西進したとしている。從って地名の比定は、殆どすべてが誤っており、全く信用できない。また松田壽男氏は遣使考の中で、チベット高原の當時の少數民族の位置設定を行い、その材料にこの地理志の文を利用している（遣使考上六五頁）。そのラサへの道いわゆる入吐蕃道は、ユック師 Father Régis Huc の旅程、ツァイダム—ブルハンブダ山—黄河源—バヤンカラ山—ムルイウス河に一致するとしている（前掲論文六七頁）。しかしこれは私の考えるルートよりは西に寄り過ぎていて、別のルートである。

② 別稿「唐代青海東邊の諸城について」（未刊）において詳說の豫定である。

③ 前掲論文

④ 哈拉庫圖は Qara qota とも考えられるが、周氏は後に哈拉庫圖爾とも書いているので（玉樹稿二七一頁）、Qara kötül を正しい寫しと見なす。ダス・ホルディッチではシャラクト Shalakuto とされている地點がこれに一致するが、何故これをシャラクトと呼ぶのかは明かでない。

⑤ ブッシェルは米柵を wooden palisade と譯しているから、木柵を正しいと見たのであろう。從うべきである。

⑥ 冊府卷九六一、一六丁表には、可跋海について次のような說明を行っている。

可跋海というのがある。赤嶺から百里あり、周圍は七百里である。水は苦くて飲むことができない。

卽ちここでは可跋海は湖であり、しかもかなりな大さである。周氏のルートに從い、赤嶺から一〇〇里の所を見ると巴顏淖爾 Bayan nayur があり、そこは一大原で、細草があり、絕好の牧場であると言う（玉樹稿二七九頁）。とすれば苦拔海はバヤンノールとするのが適當なように見える。しかし赤嶺から一〇〇里では莫離驛を二〇里ほど越すことになる。赤嶺、莫離驛の間に苦拔海が置かれる限り、やはり本文のごとく、苦拔海は阿什漢水の畔に定めざるを得ない。ここでは暫く、本文の苦拔海と冊府の可跋海とは別の存在であったと理解しておきたい。勿論、可跋 k'â b'uât もまた köbegü を寫したものであることは疑いない。

⑦ Edouard Chavannes, Documents sur les T'ou-kiue (Turcs) occidentaux, Petersbourg, 1903, p. 179, n. 1.

⑧ 張穆「蒙古游牧記」（國學基本叢書）卷一二、二八六頁。

⑨ George de Roerich, Le parler de l'Amdo, Rome, 1958, p. 118.

⑩ Sikar gompa は、玉樹稿の附圖に色航寺 sé hang ssu とあるもので、黄帽派の寺院であり、周氏の調査では三四〇人のラマが住している、ニャムツォ族地帶最大の寺院である（玉樹稿一一八頁）。ダスに Niamtso gompa とあるのもこれであろう。第三代パンチェンの道程で、ユシュル G·yu çul（玉樹）で謁見したラマに、セルカルチョヰリン寺 Gser dkar chos glin から來たものがいるが（B3PC, p. 80 a）、この寺名が正確な綴字であろう。

⑪ Giuseppe Tucci, Preliminary Report on two Scientific Expeditions in Nepal, Rome, 1956, p. 86.

⑫ ibid., p. 86, n. 5.

⑬ 新唐書吐蕃傳下一五丁裏に、

黄河の源は、西方吐蕃の列館から約四驛の所にある。每驛は二百餘里である。

と言う文があるが、この列館も列驛と同一であろう。本文では黄河から列驛まで七八〇里であり、四驛間では八〇〇里で、ほぼ一致する。ここで「約四驛」と言うのは、距離を例えて言っているので、驛がそこまで設置されていると言う意味ではあるまい。

⑭ Rolf A. Stein, Les tribus anciennes des marches sino-tibétaines, Paris, 1959, p. 81.

⑮ これが魚池だとすると、潭池の位置が問題になるが、潭池はこの後に出てくるサインクダクンノールらしい。尤もそうとすると、テキストの叙述の順序とは逆になる。

⑯ Graham Sandberg, The Exploration of Tibet, its History and Particulars from 1623 to 1904, Calcutta, 1904, p. 223.

⑰ Luciano Petech, China and Tibet in the Early 18th Century, Leiden, 1950, p. 61.

⑱ 佐藤長「吐蕃王の夏牙問懼盧川について」古代文化一五卷二號。なおトゥッチ氏はオルカ Ḥol kha（ツォタンの東方）の近くにメルロ Rmal ḥgro があったことを言うが（Tucci, op. cit. p. 77. n. 1）、私はこれを問懼盧川とは考えない。また冊府卷九八一に、八二二年の唐蕃會盟の記事があり、それには劉元鼎が「磨容に宿泊した」ことを言っている。この磨容 muâ jwong も Mal gro を寫したものであろう。新唐書吐蕃傳下六丁裏では、彼は「麋谷に宿泊した」と言うが、麋 miei も mal を寫したものと考えられる。

⑲ 私は先に、拔布川を敦煌文書に出てくる Bal po と見、ネパールの國境に近いディンリチュ Diṅ ri chu またはジャルゥチュ Ja ru chu をそれに當てたが（古代史下卷七四三頁）、それは全くの誤であるのでここに訂正しておきたい。

⑳ Bushell, op. cit., p. 540, n. 1.

㉑ Paul Pelliot, Notes sur les T'ou-yü-houen et les Sou-p'i, T'oung Pao, vol. XX, 1921.

略語表

玉樹稿＝周希武「玉樹縣志稿」臺北、一九六七年。

西藏誌＝焦應旂「西藏誌」臺北、一九六五年。
西寧志＝楊應琚「西寧府新志」
邢府＝「邢府元龜」
同文志＝「西域同文志」東洋文庫影印本、東京、一九六一年。
遣使考＝松田壽男「吐谷渾遣使考」上・下、史學雜誌第四八卷一一號・一二號。
古代史＝佐藤長「古代チベット史研究」京都、上卷一九五八年下卷一九五九年。
內府輿圖＝「乾隆內府輿圖」(清十三排圖)北京、一七七五年。
新輿圖＝「中國新輿圖」第二六圖、上海、一九一七年。
ダス＝Sarat Chandra Das, Journey to Lhasa and Central Tibet, London, 1902. 附屬地圖。
ホルディッチ＝Sir Thomas Holdich, Tibet, the Mysterious, London.
クラップロート＝Heinrich J. Klaproth, Map of Tibet from Map of Central Asia, 1830, referred to in Holdich.
B3PC＝Biography of the Third Panchenlama: Rje bla ma srid shiḥi gtsug rgyan Paṇ chen thams cad mkhyen pa Blo bzaṅ dpal ldan ye çes dpal bzaṅ poḥi sha sṅa nas kyi rnam thar pa ñi maḥi ḥod zer shes bya baḥi smad cha, ka (Tōyō Bunko Cat. No. 116—1299 (2))
DLGS＝Turrel V. Wylie, The Geography of Tibet according to the 'Dzam-gling-rgyas-bshad, Rome, 1962.
GHP＝Alfonsa Ferrari, mK'yen rtse's Guide to the Holy Places of Central Tibet, Rome, 1958.

The Route from Koko nor to Lhasa in the Tang Period

Hisashi Satō

The route from Shan-cheng 鄯城 county (Xining 西寧) to the Tibetan capital at Lhasa is recorded in the geographical monograph of the *Xin Tang shu* 新唐書 (ch. 40), under the heading for Shan-cheng county, Shan-zhou 鄯州. As this itinerary was of considerable importance as the link between Tang China and Tibet it has in the past received a good deal of scholarly attention, but existing studies have not been successful. The author here attempts to reconstruct and map the Tang route, and finds that the route was (1) halfway identical with the Qing official route, and half quite different, (2) totally distinct from the caravan route of the nineteenth and twentieth centuries which crossed the southern rim of Tsaidam, and yet (3) the shortest route between Xining and Lhasa that could have been used during the Tang period.